

平成28年度病虫害発生予報第8号

平成28年9月7日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	ダイズ	ハスモンヨトウ	—	やや多い
		カメムシ類	—	平年並
果 樹	ナシ	黒斑病	—	やや多い
		黒星病	—	やや多い
		クワコナカイガラムシ	やや早い	平年並
		シンクイムシ類	—	やや多い
	ブドウ	べと病	—	平年並
	チャノキイロアザミウマ	—	やや多い	
	ハマキムシ類	やや早い	やや多い	
	共通（ナシ、カキ）	カメムシ類	—	やや多い
野 菜	ネギ	黒斑病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	平年並	平年並
		ネギアザミウマ	平年並	やや多い
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	—	平年並
	ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並
		ナガイモコガ	平年並	平年並
		ハダニ類	平年並	平年並
	キャベツ、 ブロッコリー	べと病	平年並	平年並
		黒腐病	やや早い	やや多い
		軟腐病	平年並	やや多い
アブラムシ類		平年並	平年並	
コナガ		平年並	平年並	
	ヨトウムシ	平年並	平年並	
キャベツ、ブロッコリー、 イチゴ	ハスモンヨトウ	—	やや多い	

気象予報（抜粋）

1 か月予報（9月3日～10月2日：9月1日、広島地方気象台発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

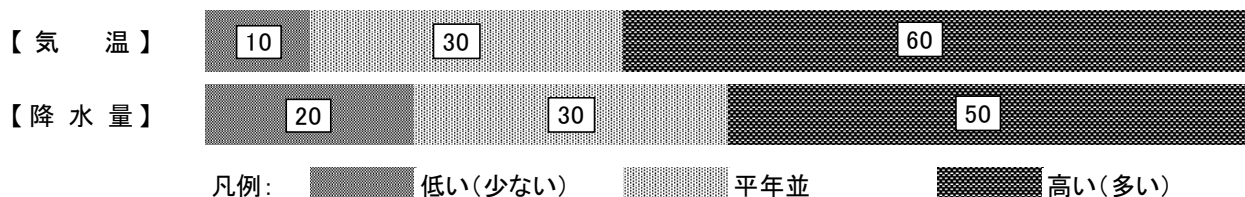
天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は多い確率50%です。

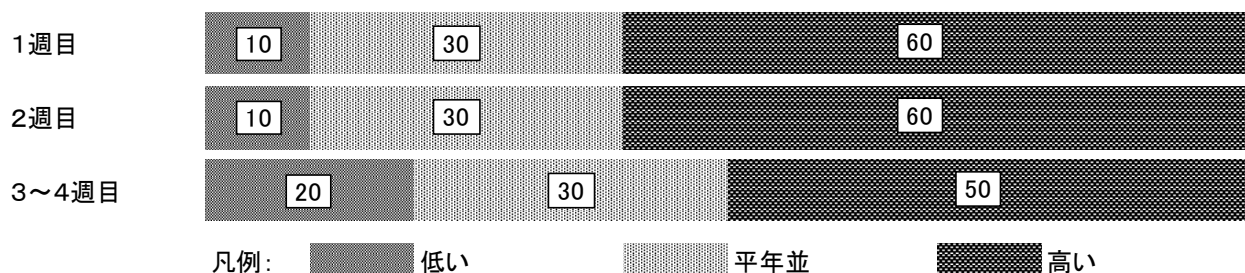
週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、高い確率60%です。

3～4週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[ダイズ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 9月1日現在、フェロモントラップによる誘殺数はやや多い。

イ 9月3日現在、現地ほ場での白変葉の発生は平年よりやや多い。

ウ これまでの発生状況及び、向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年よりやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 中齢～老齢幼虫が混在する場合は、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンプロアブル5などを散布すると、比較的効果が高い。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、白変葉の確認にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内でも観察を行う。

2 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月第6半旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数は平年よりやや少ない。

イ これまでの発生状況及び、向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

9月以降に本種の密度が急増する場合がありますので、基幹防除終了後も引き続き発生状況に注意し、発生が多い場合は病虫害防除指針等を参考にして追加防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における新梢葉での発生量は平年並で、病落果率は平年に比べやや低い。

イ 現地調査ほ場における新梢葉の発病葉率は、平年に比べて高く推移している。

ウ 現地ほ場において、果実での発病が多い園が一部で認められている。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉の発病増加と花芽への感染を防ぐため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤の500倍液などを散布する。なお、現在、新梢葉の発病が多い園では、収穫後の薬剤散布を徹底し、病原菌の花芽への侵入を防ぐ。

ウ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における果そう葉及び果実での発生量はやや多い。

イ 現地ほ場において、果実での発病が多い園が一部で認められている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は収穫終了直後にアントラコール顆粒水和剤の500倍液またはポリベリン水和剤の1, 500倍液などを散布する。

ウ さらに、多発園では10月上旬～11月上旬に2～3回の薬剤散布を行う。薬剤は、デランフロアブルの1, 000倍液、アントラコール顆粒水和剤の

- 500倍液、オキシラン水和剤の600倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）の500倍液などを使用する。
- エ 異なる品種の混植園などで薬剤散布を行う場合は、薬剤の使用基準（収穫前日数、散布回数など）に注意する。
- オ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場（園芸試験場）における発生量は平年並である。
- イ 第1世代ふ化幼虫の発生盛期は平年よりやや早い7月5日（平年：7月10日）であったことから、第2世代の幼虫ふ化時期は、平年よりやや早い8月中旬～9月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 秋期に本種の発生が認められる園では、越冬量が多くなるため、翌年に多発する可能性が高いことから、収穫後の防除を徹底する。
- イ 多発園では、収穫が終わり次第ダイアジノン水和剤34の1,000倍液などを散布する。

4 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は、全般的には平年並であるが、一部の地点でやや多い。
- イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるシンクイムシ類の果実被害は平年に比べてやや多い。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、シンクイムシ類の発生盛期であるため、晩生品種（新高、新興、王秋など）では防除を徹底する。特に、二十世紀などの中生品種で被害が多かったナシ園や地域では、果実被害が懸念されるので注意する。
- イ 薬剤は、シペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2,000倍液又はイカズチWDG1,500倍液）、テルスターフロアブル3,000倍液、サムコルフロアブル10の5,000倍液、フェニックスフロアブル4,000倍液などを散布する。なお、品種によっては収穫期となっているため、農薬の使用基準を遵守する。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予察の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地における発生量はほぼ平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はほぼ平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 秋期の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を1～2回行う。
- イ 薬剤は、収穫終了後にICボルドー48Qの50倍又は3-2式～6-3式ボルドー液を散布する。なお、無加温ハウス栽培でのビニール除去後及び露地栽培では、散布時に固着性展着剤を加用する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、黄色粘着トラップの捕獲数は平年に比べてやや多い。
- イ 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における本種による果実被害は平年並の発生量となっている。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発園では、収穫終了後に小粒種ではコルト顆粒水和剤3,000倍液など、大粒種ではパダンSG水溶剤1,500倍液などを散布する。
- イ 9月に発生が増加すると越冬量が多くなり、翌年の発生源となるため、多発園では防除を徹底する。

3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおける誘殺数は平年並となっている。
- イ 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における本種被害は平年並の発生量である。
- ウ 向こう1か月の気象予報とこれまでの発生経過から、次世代成虫の発生量はやや多く、発生ピークは平年よりやや早い9月上～中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 近年、秋期の気温が高めに推移し、9月以降多発生となるほ場が認められる。秋期の発生は越冬密度を高め、翌年春の発生量の増加を招くため、収穫後であっても注意してほ場を観察する。
- イ 多発園では、フェニックスフロアブル4,000倍液、サイアノックス水和剤の1,000倍液などを追加散布する。

[共通（ナシ、カキ）]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場における殺虫剤無散布の無袋栽培ナシ園）において、カメムシ類の被害は増加していない。
- イ 8月第5半旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における予察灯の誘殺数は、平年に比べてツヤアオカメムシが多く、チャバネアオカメムシはやや多い。また、クサギカメムシは平年並となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

野 菜

[ネ ギ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は平均気温25℃前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足によって発病が助長されるので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤など）600倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを発病初期から散布する。発病が増加する場合は、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

2 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ベストガード粒剤6kg/10a株元処理、アグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などの散布を行う。

3 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ハチハチ乳剤1,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などを7～10日間隔で薬剤を替えて散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場（ネギ）における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ ネギの薬剤は、トルネードエースDF1，000倍液、スピノエース顆粒水和剤5，000倍液などを散布する。

ウ ナガイモ（ムカゴを含む）の薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1，000倍液を用いて防除を行う。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

ウ 大雨や台風の直後には、天候回復後にできるだけ早く薬剤散布する。

エ 薬剤は、ダコニール1000の1，000倍液（ムカゴにも登録あり）、ジマインダイセン水和剤400～600倍液、アミスター20フロアブル2，000倍液などを散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、アタブロン乳剤2，000倍液（ムカゴにも登録あり）、トレボン乳剤1，000倍液（ムカゴにも登録あり）、モスピラン顆粒水溶剤4，000倍液（ムカゴにも登録あり）、プレバソンフロアブル5の2，000倍液などを7～10日間隔で2回程度散布する。

イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、コロマイト乳剤1,000倍液（ムカゴにも登録あり）、コテツフロアブル2,000倍液（ムカゴにも登録あり）などを葉裏にも付着するように丁寧に散布する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ブロッコリー調査ほ場において本病の発生は認められない。

イ 本病は気温が比較的低温、降雨が多いと発生が多くなる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツの薬剤は、ヨネポン水和剤500倍液、ダコニール1000の1,000倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤など）400～600倍液、フォリオゴールド800～1,000倍などを予防散布する。

イ ブロッコリーの薬剤は、フォリオゴールド1,000倍液などを予防散布する。なお、本剤は花蕾形成前までの散布とする。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生が散見されており、発生時期はやや早い。

イ 本病は、降雨が多い場合や、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。

イ 肥料不足になると多発しやすいため、肥料切れしないよう注意する。

ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つできるだけ早く薬剤散布する。

エ キャベツの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又はカップパーシン水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル500～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

オ ブロッコリーの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は
 銅パーシン水和剤）1，000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、
 ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。

イ 本病は、気温が高く、降雨が多いと発生が多くなる。また、台風に伴う風雨
 によっても発病が助長されやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。

イ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つて
 できるだけ早く薬剤散布する。

ウ キャベツの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又はカッ
 パーシン水和剤）1，000倍液、ドキリンフロアブル800～1，000倍液、
 ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

エ ブロッコリーの薬剤は、ナレート水和剤1，000倍液、Zボルドー
 500倍液などを散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期～定植時には、ジュリボフロアブル200倍液のセルトレイ灌注（育
 苗期後半～定植当日）、キックオフ顆粒水和剤100倍液のセルトレイ灌注（定
 植前日～定植時）などを行う。

イ 本圃での発生時には、アクタラ顆粒水溶剤3，000倍液、ランネート45
 DF1，000～2，000倍液、ウララDF2，000～3，000倍液な
 どを散布する。

5 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）でのフェロモントラップにおける
 成虫の誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期～定植時には、プレバソフロアブル5の100倍液のセルトレイ灌

注（育苗期後半～定植当日）、ジュリボフロアブル200倍液のセルトレイ灌注（育苗期後半～定植当日）、キックオフ顆粒水和剤100倍液のセルトレイ灌注（定植前日～定植時）などを行う。

イ 本圃での発生時には、トルネードエースDF2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、アニキ乳剤1,000～2,000倍液などを散布する。

6 ヨトウムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツの薬剤は、ディアナSC2,500～5,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液、ファルコンフロアブル2,000～4,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの薬剤は、ディアナSC2,500～5,000倍液、マトリックフロアブル1,000～2,000倍液、ランネート45DF1,000倍液、ファルコンフロアブル4,000倍液などを散布する。

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップの誘殺虫数はやや多い。

イ 現地調査ほ場（キャベツ、ブロッコリー）における発生量はやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツでは、ディアナSC2,500～5,000倍液、アニキ乳剤1,000～2,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液、ファルコンフロアブル2,000～4,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーでは、ディアナSC2,500～5,000倍液、アニキ乳剤1,000～2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、ファルコンフロアブル4,000倍液などを散布する。

エ イチゴでは、マッチ乳剤3,000倍液、フェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第9号の発表は、10月5日（水）の予定です。